

## 多様性尊重社会における宗教の役割

鈴木 晋 怜

### 一、問題の所在

現代社会において多様性／ダイバーシティの尊重は一つの重要なキーワードとして認識されている。そしてその背景には大きく二つの流れがある。一つは、一九六〇年代の公民権運動や女性運動に始まり、近年ではBLM (Black Lives Matter) 抗議運動・LGBT/SOGI等に代表される人権問題。もう一つは、企業や組織の発展をめざしたダイバーシティ&インクルージョン、すなわち、かつてのように企業や組織において人材の同質性を求めるのではなく、ダイバーシティを受け入れることが企業や組織にとってもむしろプラスになり、個々の人材の「違い」を受け入れ、認め合い、活かしていくことによって、長期的に見れば業績が伸び、その力が向上するという考え方である。たとえば、女性、外国人、障がい者、シニア層などの雇用を推進し、さらには多様なセクシヤリテイ、宗教、経験や職能などを受容し包摂することが求められるようになった。

そしてこうした流れの中でわれわれの価値観も従来の「われわれはすべて平等であり同等である」というもの

から「われわれはすべてひとりひとりが違っていて個性をもち、だからこそ素晴らしいのだ」という考え方に変わってきたように思われる。

しかしその一方で、次のような指摘もされている。<sup>①</sup>

多様性をめぐる問題は「すべての差異を大切にする」といった心地よい「ハッピートーク」として語られがちになり、既存の差別構造に異議を申し立てたり、差別による格差と分断を問題視したりするのではなく、あたかもそうした問題はすでに解決されて、もはや存在していないような平等幻想を作り出すことに寄与する。

多様性の尊重は確かに肯定的で明るいイメージを社会やそこに属する人々に提供するが、それによって逆に社会や組織の内部にある差別構造さらにはわれわれの心の奥底にある差別意識を隠蔽し再生産させているのではないかと懸念である。

また、あまりにも細分化された多様性を尊重することで、社会がまとまりを失い、人と人との繋がりを欠き、あらたな分断や差別や不平等を生むことも懸念される。前述の「われわれはすべてひとりひとりが違っていて個性をもち、だからこそ素晴らしいのだ」という考え方は、言い換えれば、すべての人が自分らしく生きられる社会の実現をめざすということだと思われるが、それは自分の生き方の自由が認められると同時に他者の生き方の自由も保障することになり、結果として、人と人との長期的な関係を築き上げることができにくくなるのではないか。さらには自分らしさを強く意識することによって、それを多くの人と共有できるマジョリティと共有できないマイノリティとの間に軋轢が生じ、またマイノリティ同士の間にも衝突が起こって、それが新たな分断や差

別や不平等を生むこともあるのではないかと思われる。

そこで本論では、現代の多様性尊重社会において、宗教はどのような役割をもつことができるか。果たして分断された社会をもう一度繋ぎ直すことができるのか。あるいは新たな差別や不平等から人を救い出すことができるのか。こうした問題について考えて見たい。

## 二、多様性／ダイバーシティとは

冒頭にも述べたように、多様性／ダイバーシティの尊重は、世界的な潮流としていろいろな分野で注目され推進されている。例えば、世界の最も大きなイベントの一つであった東京オリンピック・パラリンピック2020の基本コンセプトには次のように謳われている。<sup>(2)</sup>

2020年の東京大会は、「すべての人が自己ベストを目指し（全員が自己ベスト）」「一人ひとりが互いを認め合い（多様性と調和）」「そして、未来につなげよう（未来への継承）」を3つの基本コンセプトとし、史上最もイノベータータイプで、世界にポジティブな改革をもたらす大会とする。

このように「多様性と調和」が3つの基本コンセプトの一つとして掲げられ、さらにその説明として次のように記されている。

## 多様性と調和

人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩。

東京2020大会を、世界中の人々が多様性と調和の重要性を改めて認識し、共生社会をはぐくむ契機となるような大会とする。

ここに書かれていることで注目しなければならないことは、多様性とは、「人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無など、あらゆる面での違い」(傍点筆者)を肯定し、受容し、互いに認め合うということである。ここで言うあらゆる面とは具体的にはどのようなものであるだろうか。

この点について参考になる考え方として、次のような谷口の指摘を見てみたい。<sup>3)</sup>

ダイバシテイは表層的あるいは深層的かどうかによって、2つのカテゴリーに大別される。

表層的なレベルは、文字通り目に見えて識別可能なものであるため、人口統計学上の区分による特性が容易に観察され、測定することができる。

表層的なダイバシテイとは、ソーシャル・カテゴリーのダイバシテイや人口統計学上の区分によるダイバシテイだとされる。例えば、それらは、性別、人種、国籍などである。

一方、深層的なダイバシテイは、外観的に判別可能なものではなく、外部からは識別しにくいものである。その形態には、パーソナリティ、価値、態度、嗜好、信条などといった心理的な特性も含まれる。

多様性／ダイバーシティにはわかりやすい表層的なレベルとわかりにくい深層的なレベルがあるとした上で、さらに具体的に次のようなダイバーシティを挙げている。

ダイバーシティのカテゴリーが、ジェンダー、人種・民族だけだと勘違いされることがよくある。しかし先にも述べたように、ダイバーシティ・マネジメントの研究対象は多岐にわたっている。居住地、支持政党、家族構成、習慣、所属組織、社会階級、教育、長男／女、次男／女、コミュニケーションスタイル、性的指向、部門職歴、年齢・世代、未／既婚、趣味、パーソナリティ、母国語、肌の色、宗教、学習方式、外見、収入、考え方、国籍、出身地、役職、身長、体格、ジェンダー、勤続年数、勤務形態（正社員／アルバイト）、服装、社会経済的地位、身体能力などすべてが研究対象となる。

このようにダイバーシティとは、個人ひとりひとりもっているあらゆる属性が含まれるのである。

さらに言えば、多様性／ダイバーシティ尊重の一つの象徴として挙げられるジェンダーにしても、近年では極めて細分化された分類になっている。性的少数者の権利獲得運動は、一九六〇年代にアメリカのゲイ（男性同性愛者）の活動家らが、同性愛は生得的な性的指向であり、本人の意志で変えることができず、異性愛者と同性愛者は対等な権利をもつと主張したことに端を発している。その後、この運動はレズビアン（女性同性愛者）、バイセクシャル（両性愛者）、トランスジェンダー（身体的性と性自認が異なるセクシャリティ）へと拡張し、「LGBT」と総称されるようになる。それがさらに近年では、「LGBTQIA+」と呼称されるようになり、「L

GBT」に加えて、

Q IIクィア（規範的な性のあり方から外れている）／クエスチョニング（自身の性自認・性的指向が決まっていない）

I IIインターセックス（内・外性器や染色体、ホルモンなどのレベルで解剖学上の「男／女」の定義とは一致しない先天的な状態で生まれてきた）

A IIアセクシュアル（他者に対して恋愛感情も性的感情も抱かない）／アロマンス（他者に対して恋愛感情を抱かない）

＋II それ以外のさまざまなジェンダー・セクシャリティが性的少数者として分類されるようになった。

このように多様性／ダイバーシティの細分化が進んで行く中で、そのすべての違いを肯定し、受容し、互いに認め合う社会、すべての人が自分らしく生きられる社会の実現は果たして可能なのだろうか。

この問題について考えるために、次に人間の社会がどのように成立しているかということについて論じてみたい。

### 三、人間の行動規範と社会の成立

人間の社会には、その社会の多くの構成員が共有し、承認している考え方、感じ方、信じ方があり、それがその社会において中心をなす価値観となっている。また、人間の社会が一つのまとまりをもった体系として維持され、機能していくためには、その社会の成員が準拠すべき行動規範が必要であり、そしてそれはその社会の中心

的な価値観が反映されたものとなっている。

ところで、こうした行動規範は、人間の社会だけにあるものではなく、動物や魚や昆虫の世界にも存在するものである。動物や魚や昆虫にはそれぞれ固有の行動規範があり、それに従って行動している。その点においては、人間も動物たちも同じである。しかし、それらとわれわれ人間とが決定的に異なるのは、動物や魚や昆虫は、本能という生得的な能力によってその種としての必然的な行動規範がプログラムされているのに対して、人間の場合は、もはやそうした本能というものがわれわれの行動のあり方を決定するような強制力を失ってしまったているということである。われわれ人間は、本能に従って生きてはいない。動物行動学者のポルトマンは次のように語っている。<sup>④</sup>

まずわれわれは、人間と動物では本能体制の意味が全く違う、という事実から出発する。動物では、あらゆる本質的な行動様式が、あの『本能』と呼ばれる生物学的な前提から規定されているのに対して、人間の場合では、最も本能的といわれる行動の部分、たとえばセックスの領域においてさえ、個人的な決定という、はるかに自由な選択にまかされている。こういった高度に本能的な領域さえも、個人によって、また時によって、極端に違った行動様式があり、そのあいだに鋭い葛藤さえおこる可能性がある。これほど直接に種の保存に関係のないほかに生活領域では、この自由な決断という可能性はさらにいっそう大きい。

彼が指摘しているようにわれわれ人間は、原理的には、本能ではなく、個人の自由な決断によって、自分の行動様式を決定している。しかし、ここでいう個人の自由な決断とは、個人個人が自分勝手に自らの行動を決めて

いるということではない。確かに原理的にはそれは可能であるが、現実的には、そうはならない。なぜならば、本能による種としての必然的な行動プログラムが壊れている人間が、もしそれぞれの個人の欲望のままに行動してしまつたら、それは一種のアノミー状態になり、社会は形成されないからである。人間が社会を必要とし、その中で生きている以上、人間は個人としての欲望を調整し、社会を維持していくような行動規範あるいは価値観を形成しなければならないのである。

それでは、人間の場合、社会の行動規範あるいは中心的な価値観とは何によって形成されるのであろうか。動物たちの本能が変わつて、われわれの行動を規定している力とは何なのか。換言すれば、本能のままに生きることを拒否した人間が新たに自らの行動規範＝ルールのより所として構築したものは何かということである。

近代以前の社会においては、特に西欧ではおそらくそれは宗教であつたと思われる。宗教は社会規範を構築し、社会の統合を強化し、またそれに行き詰まれば、宗教自身のもつエネルギーによつて社会を変革してきた。しかし、近代社会は、最早、宗教的価値観によつては支配されていない。

本能や宗教に代わつてわれわれの行動規範となり、個人の欲望を調整するものというところ、まず考えられるのは理性である。しかし、現実場面でのわれわれは、理性によつて生きてはいない。理性は目的であつて現実ではない。いわば理性とは、欲望の反動形成として設定されたものであつて、理性もまた、欲望とは全く逆の意味において、われわれを脅かすものである。従つてわれわれが現実を生きるためには、この理性もまた制御されなければならないのである。それでは、理性と欲望のあいだにあつてその両者を制御し、調整し、われわれを現実的に行動させるものとは何であらうか。

それは、おそらく自我ではないかと思われる。われわれは自我の力によつて社会を形成し、維持しているので



ある。本能という生得的な能力によってプログラミングされた行動規範を喪失した人間、そして宗教という絶対的権威に服従することをも拒否した人間は、それらに代わって、自我という新たな能力を獲得し、それによってわれわれの行動規範をプログラミングするようになったのである。

しかし、自我によって形成されたわれわれの行動規範は、本能によって規定されている動物や絶対的権威によって規定されている宗教の規範とは違って、決して必然的なものでもないし、自明なものでもない。あくまでもそれは欲望と理性の調整の結果として作られたものである。従って、個々人の欲望のあり方が違えば、調整のされ方も違ってくるのであり、その結果も異なるのである。

われわれの行動規範が自我によるものである限り、すべての人にとって普遍的な行動規範というものはあり得ない。すべての行動規範は、それを適用される社会の内部にそこから排斥される、あるいは社会の周縁に追いやられる人々を現出させる。現実社会の様々な不平等や差別あるいは抑圧は個々人の自我と社会（同種の自我をもつ個人の集合体）の行動規範との不適合から発するのである。現実社会の周縁に追いやられてしまった人々は、そうした状況の中で常に自己不全感を抱きながら生きていくことを強いられるのである。

このように考えるならば、あらゆる多様性を認め、ひとりひとりの個人が自分らしく生きていける社会の実現は口で言うほど簡単なものではないし、むしろ原理的には不可能ではないかと思われる。社会における自らの正当性・優位性を担保するにはその社会のマジョリティ側につかなければならないし、またマイノリティを作り出すことによって、その正当性・優位性が強化されていく。さらにはマイノリティの中でさえ、より細分化された形ではあるものの、同じような構図が作り出されていくのである。もちろん、私たちひとりひとりもマジョリティ性とマイノリティ性の両方を持ち合わせており、そこには交差性があつて、ある場面ではマジョリティ側

に属し、ある場面ではマイノリティ側に属するということもある。しかしいずれにしても人間が社会を必要とする限り、そこにはすべての個人が自分らしく生きていくことが困難な状況が生み出されているのではないだろうか。

#### 四、宗教と社会の三つの関係性

ではこうした人間の社会にあつて、宗教とはどのような役割が求められ、またどのような役割を果たすことができるのだろうか。

現代社会における宗教の役割を社会との関係性において考えるとき、それは、社会の中で自己不全感を抱きながら生きている人たちの自我を活性化させ、周縁に押しやられた状態から解放することにあると思われる。それでは、宗教はどのようにしてそうした人たち、すなわち自らの自我と社会との行動規範の不適合に苦しんでいる人たちを解放しようとするのだろうか。それを社会との関係性という視点から見れば次のような三つの関係のもち方があるように思われる。

##### ①非社会的宗教

まず一つは、自らの自我と社会の行動規範との不適合を現実社会において調停しようとするのをあきらめ、現実社会ではない世界を想定し、そこでの自己実現を希求する立場である。この場合、現実社会ではない世界での自己実現を確かなものにするためには、絶対者にそれを約束してもらわなければならない。そしてその代わりに、自分は絶対者に帰依し、その絶対者が提示する行動規範に従った現実社会での生活を送ることになる。たとえそ

れが、現実社会の行動規範に違背するものであっても、彼らのめざすところはあくまでも現実社会ではない世界での自己実現であるので、この世の行動規範はさほど意味をもたない。従って彼らは、社会に対しては無関心な態度をとることであり、社会の側がその社会の行動規範に強制的に従わせようとした場合は、それを拒否し、結果的に社会からは孤立していく。このような宗教は反社会的宗教として位置づけることができよう。

## ②反社会的宗教

次に、あくまでも自分の自我に固執し、それを現実社会の中でも貫こうとする立場がある。彼らは、当然、現実社会と衝突し、軋轢を招くが、反社会的宗教のように、現実社会における調停をあきらめることはせず、現実社会の中で自分たちの自己実現をめざす。具体的には、現実社会の中に、同信者による閉鎖的な独立世界をつくり、いわゆるミニ国家のような体制をとり、さらには、その自分たちの体制を拡張するために現実社会の中に進出し、それにとって変わろうとする指向性をもつ。社会から見れば非常に危険な宗教ということになり、社会は徹底的にこれを弾圧しようとする。このような宗教は反社会的宗教として位置づけることができよう。

## ③共社会的宗教

そしてもう一つは、自分の自我は大事にしながらも、それを相対化することによって、現実社会における行動規範と自我との不適合を調停しようとする立場が考えられる。すなわち、個々の自我も社会の行動規範も、絶対的なものではなく、時代や時の権力のあり様によって変化するものであるから、そのいずれにもこだわる必要がないとする立場である。どれか特定の価値観を絶対視して、それに自らを適合させようとするから、そこからは

じかれる人々を再生産し続けるのであって、そのどれにも同一化しなければ、どんな社会の中にあっても自由でいられるというわけである。すなわちあらゆる価値や規範を相対化することによって、その中に組み込まれること、あるいはそこから排斥されることから解放される。そしてここで言う「あらゆる価値や規範を相対化する」ということは、それらを無意味なものとして無化することではない。あらゆる価値や規範の意味を認めながら、しかし、そのいずれにも拘泥しないということである。

そしてこの立場こそが、現代社会において唯一、社会と共存可能な宗教のあり方なのではないかと思われる。社会を無視するのではなく、社会に反抗するわけでもない。社会の規範はそれとして認めながら、しかし、それを唯一のものとしてそれに同一化しようとはしない。そしてもちろん、自らの自我に対しても同様な態度をとるのである。このような宗教は共社会的宗教として位置づけることができよう。

##### 五、多様性尊重社会における宗教の役割とは

この三つの関係性の中で、あらゆる多様性を受容し、認め合い、社会の中にそれを包摂できるものは共社会的宗教である。非社会的宗教も反社会的宗教も、その宗教を信仰している人にとっては救いをもたらされるかもしれないが、反面、異端を生み出し、それが新たな差別や抑圧を再生産することに繋がるし、また現実の社会の中では依然として自分らしく生きにくいという状況であることに変わりはない。

もし宗教が、社会のマイノリティとして周縁に追いやられ、そこから生ずる差別や抑圧に苦しむ人々を解放するという役割をもつているとすれば、必然的に宗教は、その社会が肯定している価値観≡常識とは別の価値観を有していなければならない。もしある宗教が社会的な善悪と同じ価値観しか有していないとすれば、その宗教は

社会によって周縁に追いやられていく人々を救うことはできない。社会の中で中心的位置を占める価値観を相対化する、あるいはそれを超越することによって、はじめて救いがもたらされる。

しかし、社会の側からみれば、社会的常識を相対化あるいは超越しようとすることは、日常性からの逸脱であり、それはしばしば狂気となって映る。そして、この意味において考えるならば、非日常性を志向することによって救いをもたらす宗教とあくまでも日常性を基盤とすることによって安定的に成立する社会とは到底相容れることは不可能となる。宗教が社会から弾圧されるのは、まさにこの図式によるものであり、非社会的宗教や反社会的宗教に対する社会の対応もきわめて先鋭的な形で両者の対立が顕在化したものと言えよう。

しかし、日常と非日常あるいは常識と狂気を並立的に二項対立図式の中で捉えることは、両者を同じ次元におくこととなり、この枠組みの中にいる限りは、両者とも同じ体質を有することになってしまう。

先に述べたように、宗教によって苦悩からの解放・救済が可能になるためには、社会的常識あるいは日常的感性とは異なる価値観・世界観を提示しなければならない。そして、それは、二項対立図式における非社会・非常識あるいは反社会・反常識というものではなく、社会的常識や日常的感性を包み込みながらも、なおかつそれらを超えていくものでなければならぬ。それが、二項対立図式を超えた狂気性であり、そうした世界を生きることが救いへとつながっていく。さらに「そうした世界」とは、現実の社会、換言するならば、今まさに生きているこの世界と別個にあるのではなく、あくまでも「この世界＝現世」において実現されていかなければならないのである。なぜならば、現実の社会を否定して別の社会での救いを求めたところで、それは一つの希望にはなっても、現実にある苦悩からの解放・救済にはなり得ない。また、現実社会に反抗してあくまでも自分たちの教義にかなう世界の実現をめざすならば、いわゆる「あれかこれか」という二項対立図式の中に落ち込むことに

なり、もし、そうした世界が実現しても、みずからの教義しか認めない以上、必然的にそこからはじかれた人々、すなわち新たな苦悩を抱えた人々を再生産することになるだろう。

あくまでも現実社会の中にながら、なおかつそれを超えていく。それは、ある特定の価値観に執着することなく、あらゆる価値観を相対化していくことによって初めて可能となる。そうすることによって、われわれは、突出したある部分から解放され、全体へ還ることができるのではないか。

あらゆる価値を相対化するということは、ある特定の価値のみにアイデンティファイ（同一化）しないということである。そしてそれは、あらゆる価値を否定するのではなく、あらゆる価値を肯定しながら、同時にそのいずれにも拘束されないということである。そこに、社会の中にながら、その社会からはじかれた人々を救いへと導く可能性が開かれてくるのではないだろうか。一見、それは、じつに消極的で曖昧な態度として映るかもしれない。定見をもたず、フラフラと中空を漂っているように見える。しかし、そうした態度こそ、あらゆる多様性を受容し、認め合い、包摂することに繋がり、現実社会の中で自分らしく生きられない人々に救いをもたらすことになるのではないだろうか。ある社会の中にいて、その社会のもつ文化の体制を認めながら、しかも、それにアイデンティファイしない。こうした態度は、社会の枠組みの中で、その価値体系にさして矛盾を感じていないマジヨリテイから見れば、まさに狂気であり、白眼視の対象となるかもしれない。しかし、そうした人々は、それほど宗教を必要としないのである。自分の自我の強さだけで、当面は生きていけるのだ。宗教とは、その社会や文化と自我との齟齬に苦悩する人々から必要とされる。そして、その苦悩は、別の価値観をもつ社会や文化を創造することによっては本質的には解決されず、いずれ同じような苦悩が再生産されることとなる。もし、われわれがあらゆる多様性を受容し、認め合い、包摂する社会の実現を目指し、すべての人を救っていかうとする

ならば、この社会の中であって、かつこの社会を超えていく道筋を追求していかなければならないのではないだろうか。

六、結びにかえて

高野山万灯会願文の中にある弘法大師の言葉

「虚空尽き 涅槃尽き 衆生尽きなば 我が願いも尽きなむ」

(この宇宙が尽き果て、すべての生きとし生けるものが仏となり、涅槃を求めるものがなくなるまで、私の願いは終わりを迎えることはない。)

には、この世界の生きとし生けるものすべてを救うという弘法大師の強い決意が表されている。

そして、真言密教の教えの根幹である曼荼羅には、あらゆる異質な存在がそれぞれの個性を發揮しつつ、全体と調和し、大日如来に帰一していく世界観が表されている。そこには、あらゆる多様性を受容し、認め合い、包摂するというまさに現代社会が目指し、しかし日常性の枠の中だけでは実現が難しい社会のあり様が、真言密教というコスモロジーの中で見事に実現されている。

多様性尊重社会を標榜しながら、実はより潜在的に新たな差別や抑圧を再生産し続ける現代社会において、真言密教の果たす役割は極めて大きいと思われる。

註

- (1) 『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』  
岩淵功一編 青弓社 16頁
- (2) [https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/special/  
common/images/header\\_bureau\\_logo.png](https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/special/common/images/header_bureau_logo.png)
- (3) 『ダイバーシティ・マネージメント ―多様性をいかす組織』  
谷口真美著 白桃書房 41―42頁
- (4) 『人間はどこまで動物か ―新しい人間像のために―』ポ  
ルトマン、A著 高木正孝訳 岩波新書 84頁

〈キーワード〉

多様性／ダイバーシティ・宗教と社会・宗教の役割